



写真6 ソコロの VLA 電波望遠鏡。口径 25m 望遠鏡が約 30km にわたって Y 字形に配列されている。

出してくれるに違いない。着いて3日目の夜から観測が始まった。観測といっても私たちは、ほとんど何もする必要がない。全てオペレーターが操作してくれる。我々は、20秒おきに出てくる電波の信号強度をブラウン管で時々、眺めているだけだ。観測が始まってしばらくすると、オペレーターが「これは極端に弱い電波源だ。殆んどブラックスがうかっていない。」というのである。私はもしや望遠鏡の位置が狂ってはいないか、自分のノートで何回も確かめてみた。またノートの数字自体が間違っていないだろうかと疑った。この天体の座標は私が木曾観測所で精度よく測定したのだから、私に責任がある。「落ち着け、落ち着け、2週間前パロマーでこの数字を使ってちゃんと天体が入ってきたではないか。」とにかくこの段階で強い電波源でないことがはっきりした。

翌日からデータの解析が始まった。磁気テープに記録されている30個の望遠鏡1つ1つから電波でみた空の写真を作り出す作業である。それは、祖父江、出口、福井の3人が変わる変わる徹夜をしながら1週間近くコンピューターと戦った。出口氏以外は、みな初めての経験であり、何回も失敗をくり返した。途中、今にもとっ組み合いをせんばかりに激しく議論もした。K. ジョンストンが時々助けてくれた。前天文台長の D. ヒーシェンも暖かい目で勇気づけてくれた。R. スラメックは、鋭い目つきで我々を眺めていた。ようやく写真が出来上がった。それを眺めてみるとこの天体のところには、電波源は何もない。少し離れたところに2つ、3つ非常に弱い電波源が見つかっただけであった。

## 8. エピローグ

この天体を発見して以来、約1年半このようにして小さなドラマの第1幕は終わった。みな期待していたよ

うな爆発している銀河ではなさそうだ。それならどう解釈したらよいだろうか。我々がこの観測を行なっている頃、ESOの R. ウェストラが NGC 4650A の観測を創刊されたばかりのインドの天体物理学誌に発表した。その天体は我々の銀河と非常に似た形をしていて、いわば兄弟分が発見されたわけである。彼らはESOの3.6m鏡を使って写真とスペクトルを撮り、NGC 4650A はリング銀河をま横からみたものだろうと結論した。

リング銀河とは、写真1でわかるようにリング状の銀河のことで1960年に H. シャプレーらが最初に発見した天体である。1976年に、E. シュピーゲルや R. リンズらが観測を始めてから注目され出した天体で1977年 L. トンプソンによって新たに40個が見つけ出されている。その成因は、2つの銀河が衝突してできたのではないかと A. トゥーモアらが言っている。観測が未だ十分でなくこれからの研究に待たねばならない。果して MCG 5-29-86 が NGC 4650A と同じようにま横のリング銀河なのだろうか。もしそうならばどうしてプロレイトなバルジができたのだろうか。MCG 5-29-86 にまつわる謎は深まるばかりである。第2幕はどんなドラマになるであろうか？

## 学会だより

### 会費納入のお願い

4月より会計年度が改まりますので新年度会費の納入をお願いします。会費は**通常会員 3,500円**、**特別会員 10,000円**です。納入には今月号に同封の振込用紙を利用して三菱銀行三鷹支店日本天文学会普通預金口座(222-4434400)、または郵便振替口座社団法人日本天文学会(東京 6-13595)宛振りこみか、あるいは現金書留を御利用下さい。会の円滑な運営のため、できるだけ早く御納入下さるようお願いいたします。

☆ ☆ ☆

☆ ☆